

認知症になった私が

SATO, MASAHIKO

佐藤雅彦

私が伝えたいこと



大月書店



樋口直美  
Higuchi Naomi

# 私の脳で 起こったこと

レビー小体型認知症からの復活

1匹の幻視の虫が、  
私の存在を揺るがせる。

〈若年性レビー小体型認知症〉本人による、  
世界初の自己観察と思索の記録——

これが本当に認知症なのか？

解説：藤野武彦 (九州大学名誉教授、医学博士)

ブックマン社

<拙著を通して訴えたかったこと>

# 認知症を巡る多くの問題は **人災**

(不適切な医療と限りなくアウェイな環境がつくるBPSD)

## 認知症とは いったい 何なのか

(今までの説明・理解は、根本から違っている)

人間が生きていくとはどういうことか

# 最大の問題は 医療

- ・ 認知症権威による「認知症」の説明が**偏見**をつくってきた
- ・ 医師が書く**医療情報**で、診断された本人と家族が**絶望**
- ・ **誤診**の多さ 知識のなさ 診断を変えない 減薬しない
- ・ 診断後の精神的・社会的**サポート**のなさ
- ・ 薬の**副作用**による悪化（薬剤性せん妄）
- ・ 精神科病院への**入院**は、誰のために必要なのか？

NHKが全国の認知症専門医を対象にした  
アンケート調査

2014年の1年間に

認知症と**誤診**されていた患者数

**3583人**

認知症ではないのに認知症と診断されていた患者  
を診たことがある認知症専門医

**8割**

2015年11月4日放送のNHK「あさイチ」から

「レビー小体型認知症の最大の問題は、  
医師による**誤診が多い**ということです」

認知症の約**2割**を占めるのに 2012年に認知症疾患医療センターの  
専門医に診断されたDLBは、認知症全体の**4.3%**。

「このデータは、いかに誤診が多いかを物語っている。  
最も問題なのは、誤診により、多くのDLBの患者さんの  
**適切な治療が手遅れ**になっていること。

DLBは、早期発見早期治療で、  
**認知症の発症や進行を遅らせることのできる病気**なのです」

小阪憲司:横浜市立大学名誉教授 レビー小体型認知症  
(DLB) の発見者

(出典：ドクタージャーナル vol.15 2015)

DLBは早期には認知機能障害、特に**記憶障害は目立たないことが多い**。

認知症の症状は、後から出てくることが多い。

DLBは、**全身病**とも言えます。

レビー小体型**認知症**という病名を付けたこと自体が問題と言えます。  
私が提唱した**びまん性レビー小体病**が、最も適していると考えます。

認知症という病名が付いてしまったために、かえって病態が分かりづらく、  
認知症が出ていないと**診断できない**ということになってしまっている。  
そのことで多くの医師が**誤診**してしまうのです。

レビー小体型認知症は、認知症の症状が出る前から疑わなければならない病気なのです。

早く診断し治療を行えば、**認知症の進展を予防できる可能性がある**わけです。

かかりつけ医の中で**認知症をよくわかっていない医師があまりにも多い**と感じます。

小阪憲司氏 レビー小体型認知症 (DLB) 発見者 (出典: ドクタージャーナル vol.15 2015)

レビー小体型認知症は、初期には **記憶障害が出にくい**

→**誤診**されやすい

→**薬剤過敏性**が特徴。薬で劇的に悪化しやすい

**適切な治療**（副作用の原因である薬を減らす・止める）と  
**ケア**（ストレスを減らすだけでも。）で 劇的に**改善する**

→レビー小体型認知症の認知機能低下は、

**意識障害・せん妄**によって起こっているから

レビー小体型認知症の**幻視**は、精神症状でもBPSDでもない

# 症状を悪化させ BPSDを作る アウェイな環境

家族 介護施設 世間

「何もできない人 困った人 恥」

安心、理解者、居場所、役割がない

ストレス（絶望、不安、恐怖）

が症状を悪化させる



- <講演動画> 認知症スタジアム（動画ライブラリ）
- <体験談動画> 健康と病いの語りディペックス・ジャパン
- <インタビュー記事> 認知症オンライン 日刊ゲンダイ他
- <講演で使用したスライド> スライドシェア（樋口直美）
- <放送> NHKあさイチ（11月4日）



樋口直美  
Higuchi Naomi

# 私の脳で 起こったこと

レビー小体型認知症からの復活

1匹の幻視の虫が、  
私の存在を揺るがせる。

〈若年性レビー小体型認知症〉本人による、  
世界初の自己観察と思索の記録——

これが本当に認知症なのか？

解説：藤野武彦（九州大学名誉教授、医学博士）

ブックマン社



（コラムを寄稿）

よりよい医療に変わるために  
ジャーナリズムに求めるもの

薬の問題・医師の問題もあるが  
医療を受ける側の問題も大きい

お任せも盲信もいけない。自ら病気を学び、考え、

医師と協力して、より良い医療を目指そう！

<正しい>情報を伝えるジャーナリズムの役割は大

超高齢化社会 今のままでは破綻する

医療・介護・社会のあり方・意識を大転換する好機